

続・現代英米語の諸相

Aspects of Modern British and American English

Part II

明海大学教授

山 岸 勝 榮 著



こびあん書房

東 京



続・現代英米語の諸相

(1992年)

平成 4 年 3 月 10 日 初版印刷

平成 4 年 3 月 20 日 初版発行

著 者 © 山 岸 勝 榮
発 行 者 木 村 欽 一
製 版 所 大 秋 産 業 株 式 会 社
印 刷 所 朗 生 印 刷 株 式 会 社
製 本 所 鈴 木 製 本

東京都文京区小日向 3-11-13 (〒 112)

発 行 所 株式 こびあん書房
 会社

電 話 東 京 03-3941-4683

F A X 03-3941-4683

振 替 東 京 3-191812

[0 0 5 1]

は し が き

本書は、先に上梓した『現代英米語の諸相』（こびあん書房、平成元年〔1989年〕六月刊）の続編を成すものであり、「第一部 和英辞典論考」、「第二部 英和辞典論考」、「第三部 現代英米語とビジネスとその周辺」、「第四部 書評」の四部、および、付録7篇から構成されている。それらはまた、本書巻末の「初出一覧」が示す通り、「現代英語教育」誌（研究社出版）、「時事英語研究」誌（研究社出版）、「英語教育」誌（大修館書店）、「正論」誌（サンケイ新聞社）等の雑誌に寄稿したもの、新たに書き下ろしたもの、講演などの原稿を元にしたもの、読者から拙論への反応として寄せられたものの四種から成っている。そのうち、読者から寄せられたものを除く全ての文章に対して、単行本としての本書に収録しやすいよう、統一的に、適当な加除修正を行った。ただし、論旨には、その後も、何の変更も生じていない。

前著『現代英米語の諸相』を纏めて以来、英語諸辞典、辞書編纂理念、現代英米語等に関して、さらに言及しておきたいこと、書き残しておきたいこと等が続出し、上記諸誌には、貴重な誌面を幾度も、快く提供していただいた。まことに有り難いことであった。関係諸誌には、本書を通して、改めて、心から御礼を申し上げる。前著に対する読者諸氏、友人、知人、担当諸学生、その他からの読後感や種々の要望が、その続編、すなわち本書を纏める一大動機となった。

私のここ数年来の学問的志向は、主に、より良き和英辞典を編纂すること、学習英和辞典の諸問題を解決すること、さらには、それらと関連性を持った事柄、とりわけ口語英語の普及に、可能な限り建設的私見を述べる

こと、の三点に傾いている。生来の不敏者である私が、ただただ黙々と、好きな英語道（みち）を歩きながら、思い、感じ、信じて来た事を、率直に書き続けただけのことであるので、明敏なる読者諸氏の目にどう映じるのか、少なからず心配であるが、我が国における英語辞書学および英語教育一般の真の発展を願う者の真意と熱意は、必ずやお汲み取りいただけるものと思う。もちろん、異見の出るであろうことは予測できるし、異見を交わしたり、戦わせたりすることによってのみ、私の真意と熱意は結花・結実の時季を早めるものと信ずる。

第二部として纏めた「英和辞典論考」の約半分は、代々木ゼミナール講師・副島隆彦氏を中心となって書かれた『欠陥英和辞典の研究』と、同氏著『英和辞書大論争！』の批判に当てられている（両書とも、JICC出版局刊の『別冊宝島』誌を利用）。しかし、私の批判の対象は、あくまでも、氏の“学問的不正確さ”と“英語辞書批判の異常さ”に対してであって、氏による両書の玉（ぎょく）の部分に関しては、十二分に認識しているつもりである。

我が国の英語教育界は問題山積だという点においても、あるいはまた、我が国の英語教育者・辞書学者〔辞書関係者〕が多数の“被害者”を産出しているという点においても、氏と私とは見解をほぼ一にしているようである。しかし、両者の間には、一点だけ、決定的に異なる点がある。それは、お互いの“ルサンチマンの解消”の仕方の違いである。

氏は、そうした原因の一端を、研究社および同社発行の英和辞典、とりわけ『ライトハウス英和辞典』『新英和中辞典』の二点のせいにし、『欠陥英和辞典の研究』の刊行を、研究社への“お礼参り”のつもりだとした（その“お礼参り”を、氏の“ルサンチマンの解消”であったと見做して差し支えなからう）。しかし、私は、こと学問に関する限り、氏の場合に見られるような“ルサンチマンの解消”の仕方を好まない。

氏は、辞書と言うものは100パーセント正しくなければならないのである、と言う。確かに、お説の通りである。しかし、それが、理想通りには行かない、あるいは運ばないのが、神ならぬ身、人間の悲しさ、弱さではないか。何よりも、氏自身の両著書からして、誤謬・誤解等が極めて多い。『欠陥英和辞典の研究』などは、表紙に印刷された英語、すなわち同書に対する英語名にさえ、誤謬が発見される（本書P.112およびP.144

参照)。氏とて、自著の“顔”たる表紙から誤謬に彩られた書物など、毛頭、書くつもりはなかったであろう。ところが、氏は、その誤謬には、自分も早くから気付いていたと言いながら、それを、いつまでも訂正しようとしめない（本書P.127参照）。そうした、自らの非良心的な学問的態度と、研究社の上記二辞典を声高に糾弾する態度とは、いったい、どこで、どのように連関すると言うのであろうか。

過度にセンセーショナルな同氏の二著作に対して、関係辞書学者は公式見解を、他の英語辞書学者は、建設的・良心的私見を、それぞれ、堂々と明らかにすべきであった。その義務さえあったはずである。正直のところ、一般の英語教授者の間でも、大いに活発な議論が、次々と展開されて行っても良かったように思う。

そのような、じつに寒々とした状況下にあって、「正論」誌（平成二年〔1990年〕五月号）に寄稿した拙論、「正しい『英和辞書』一二つの英和辞典・提訴問題」（本書 pp. 132-144 に再録）に対する、一般読者・田尻耕一氏からの一早い反応は、英語（辞書・教育）関係者からは何の具体的反応もなかった折だけに、まことに喜ばしいものであった。将来の英和辞典編纂および和英辞典編纂の在り方について考える上で、氏の所見は極めて有益かつ示唆的である。そこで、本書では、氏からの私宛の書簡三通を、滞米中の氏のご快諾をいただいた上で、付録の一部として掲載することにした。この点、氏の寛大なるご理解に対して、心底より、深く感謝申し上げる。

また、秋山武氏著『辞書戦争を裁く』（時潮社、平成二年〔1990年〕七月刊、全261頁）も、大いに頼もしい一書であった。筆者略歴には、明治四十四年〔1911年〕生れの弁理士とある。半世紀近い長年月を、英・独技術文献の翻訳業に従事して来られた方だけあって、執筆姿勢には一貫して気骨の感じられる、具体的で、頼もしい副島氏批判の書であった。一書をものしてまで自説を開陳された同氏に、内容の詳細に関する賛否の域を超えて、まず大きな感動を覚えたことを、ここに特記しておきたいと思う。

私はまた、「アンカー・サンライズ問題」（pp. 91-4；pp. 132-141参照）

に対して、重大な関心を持っている。学習研究社と旺文社のいずれかが、虚言を弄して、我が国の英語教育界と、全ての英語学習者とを欺いているはずである。現在、係争中の問題であるので、残念ながら、本書ではこれ以上の私見の開陳を避けざるを得ないが、個人的には、司直の裁きが出た暁に、本件を徹底究明してみても良いとさえ思っている（“改訂版を出してしまえば、それで一件落着”と言うわけには行かないし、また、この種の問題をそのまま風化させてはならない）。この種の問題は、本来、我が国の英語教育関係者、とりわけ辞書関係者が、大々的、徹底的に論議してしかるべき性質のものであり、ある意味での“門外漢”たる裁判官や弁護士諸氏に委ねておいて良いものではないからである。単なる“雄弁家”や“詭弁家”が本件に勝訴すると言うのでは、正義の二字が余りにも空しく響き、哀れに映る。正論が正論として通用しない国、学問的真理が学問的真理として是認されない国、我が国をそのような不条理の国、あるいは理不尽の国にしてしまってはならない。我が方こそが正しいと信ずるいずれかの出版社よ、当然の権利のために、今後とも、気丈夫に振舞い給え。また、我が国の出版倫理確立のために、勇々しく闘い給え。私は、声を大にして、そう言いたいと思う。

それにしても、これまた残念至極に思われることは、『アンカー英和辞典』または『サンライズ英和辞典』に執筆者として関係した英語教員諸氏が沈黙を守り続けていることである。まず間違いなく、いずれかの英和辞典に関係した諸氏の中に、事の真相を承知している人が複数は存在するはずである。それが、“保身”のためか、はたまた“事の平穩”のためかは定かではないが、貝のように口を固く閉ざしたまま、黙して語らない。学問的良心からして、そんなことが許されて良からうはずもない。

部外者の英語教員から、時たま聞こえて来る声も、「亜流を責めることができるのは、真に独創的なものだけである。自分側だって、いくらかは他の優れたところを採用したことがあるという自覚があったら、とても自分と同じとがのある者を非難できまい」などと言う低次元のものばかりであるのも情ない（本書 P. 138 参照）。じつはこの意見は、これまでの辞書関係者たちの多くが、編纂上の、あるいは、執筆上の倫理を確立しないままに辞書作りをやって来たことの一証左となるものなのである。「他の優れたところを採用する」にしても、それにはそれで“仕方”や“程度”

がある（学習研究社が旺文社を提訴した理由は、まさにその点を明確にしたいからであろう）。前記したような意見は、そうしたルールを無視する風潮がはびこっている中で生起するものである。

出版社が出版上の倫理を遵守しなければならないことは当然のことなのであるが、その遵守を確実なものにするのは、外部者（この場合は英語教育関係者）である。外部者が、襟を正して編集・監修・執筆に参加すれば、出版社自身も、自然とそれを見習うものである。いや、見習わざるを得なくなるのである。英語教育関係者が、世界語の一つとしての英語を教授し、自らがその研鑽の道を辿る中で求めなければならないものは、世界に通用する常識（common sense）であろう。とすれば、この「アンカー・サンライズ問題」から私を感じるような“事なかれ主義”は、決して、その常識にはなり得ないはずである。

“何事も徹底的に 論議したり、 究明したりしたがない国”，“そうしようともしない国”，外国の多くの識者は日本をそのように見ている。だからこそ，「（日本は）民主主義国のように見えるし，そんな感じも，匂いもする。だが，完全な民主主義国ではない」（P. 180 参照）と厳しく批判されたり，「日本という国はどのような国なのだろう。世界中の注目と気苦労と驚嘆の的となっているこの国は。日本人とはどのような国民なのだろうか。称賛されることはあっても，誰からも愛されることのないこれらの人々は」（正編『現代英米語の諸相』，P. 323 参照）と憫笑を投げ掛けられたりするのである。私と交流のある多数の外国人，あるいは英語国からの同僚たちも，ほとんど例外なく，そうした“日本評”に同感し，深く，大きな嘆息を漏らしている。

そうした国民的性癖は，既に知り得たごとく，英語教育界全体からも，強烈に感じ取ることができるし，それゆえに，結果的には，英語教育における“視座”の据え所を不安定なものとし，その“ヴィジョン”，換言すれば，我々はいったい，何のために外国語を学ぶのか，多数ある外国語の中で，なぜ“英語”を特別視しなければならないのか，それが英語であるとすれば，どのようなタイプの英語を，どのように，どの程度学び，体得すれば良いのか，体得したものをどのように活用して行けば良いのか，などと言った本質論を論及する力，を不活発なものにしているのである。とにもかくにも，“国際性”の唱導者たるべき英語教育関係者の極

めて多数が、今日に至るも、極度に閉鎖的、逃避的、因習的、非建設的であるのは、否定しようにも否定し得ない事実である。今、我々英語教育関係者に真に必要とされているのは、確固たる“視座”と、明瞭・明確なる“ヴィジョン”である。

こびあん書房主・木村欽一氏には、今回もまた、終始、深いご理解と絶大なるご支援を頂戴した。しかも、跋文としての「返り花」では、過分なお言葉を頂戴した。同文のご寄稿は、同書房より十三点目の著作、すなわち本書を刊行していただくのを記念して、出版社主としての、また富士見言語文化研究会（旧称「富士見同人会」）の会員仲間としての、さらには、本書の第一読者としての、氏のご感想やら、お気持ちやらをお書き留め願えないだろうかと言う、私の身勝手なお願いを快くお引き受け下さったのものである。まことに有り難いことであつた。私の一生の光栄とさせていただく。

因みに、私が初代の世話役を務めた同研究会では、会誌「ふじみ」を発行しているが、同誌も、先月（平成三年十二月）をもって、第十三号に達した。同会誌が、俗に言う“三号雑誌”に終わらずに済んだのも、ひとえに木村氏が示された、あるいは、実行された、長年月にわたるご厚情とご後援の賜物である。他の会員諸氏を差し置いて僭越であるが、氏には、この点に対しても、改めて、深く御礼申し上げる。

最後になったが、日野寿憲（ひさのり）君には、本書の校正刷り第二校、第三校の通読の労をお取りいただいた。いつに変わらぬ同君のご厚志を有り難く思う。

平成四年（1992年）元旦

山 岸 勝 榮

目 次

はしがき	vii
第一部 和英辞典論考	3
1. 和英辞典を考える Part Ⅲ	5
(1) 訂正・検討を要する訳語	5
(2) 訂正・検討を要する訳語（続）	9
(3) 地域表示について	12
(4) 気になる例文のこと	16
(5) 文化と言語表現の問題	20
(6) 哲学を持った和英辞典を	23
2. 和英辞典を考える Part Ⅳ	28
(1) 和英辞典と私	28
(2) “英語嫌い”と和英辞典	31
(3) 和英辞典と差別問題	35
(4) 和英辞典と差別問題（続）	38
(5) 「少年よ、大志を抱け」	42
(6) もっと和英辞典を	45
3. 正しい「和英辞書」	50
4. 日本と日本人が語れる和英辞典を	61
5. 英語で日本の心をーそのための和英辞典を	65
6. 英語教育に新しい視座をーそれに役立つ和英辞典を	68
7. 和英辞典の国語辞典性	70
8. “英語好き”を生む和英辞典を	74
9. “英語好き”を生む和英辞典を（続）	78
10. 和英辞典評価の在り方ーあるアンケート葉書から	84

第二部 英和辞典論考	89
1. 英和辞典を考える	91
(1) 英和辞典と著作権【創作性】	91
(2) 辞書評価の在り方	95
(3) 成句的表現と誤謬性	98
(4) 訳語の責任について	102
(5) より良い英和辞典の姿を求めて	106
2. 『欠陥英和辞典の研究』の嘘	110
3. 英和辞書批判の在り方—『欠陥英和辞典の研究』の場合	118
4. 英和辞典と典拠主義—『英和辞典大論争!』を読んで	125
5. 正しい「英和辞書」—二つの英和辞典・提訴問題	132
6. 英和辞典の選び方	145
第三部 現代英米語とビジネスとその周辺	147
1. 英米語の違いの種々相	149
2. 英語とスピーチレベル	160
3. ビジネス交渉の英語表現	164
4. 会話・討論のマナーと戦略	174
5. 海外赴任生活に必要な英語	181
6. 知っておきたい商品名	203
7. 生活語彙の語源	215
8. ロンドンの一つの楽しみ方	221
第四部 書 評（自薦書を含む）	225
1. 『アメリカ英語概説』	227
2. 『こんなにもある英語教科書の間違い』	229
3. 『えい・べい語考現学—どこがどう違う?』	231
4. 『ニューアンカー和英辞典』	233
付録1. 「正しい『英和辞書』」（「正論」誌）への読者の反応	235
付録2. 日本語文化と英語文化	247

付録3. 日本人と国際性.....	261
付録4. これからの英語教育と辞書.....	271
付録5. 外国人の疑問あれこれ.....	282
付録6. 大学英語テキストについて.....	288
付録7. 悪態の宗教性と俗性.....	291
返 り 花 木村 欽一.....	297
初 出 一 覧.....	307
索 引.....	313

続・現代英米語の諸相

Aspects of Modern British and American English

Part II

by

YAMAGISHI Katsuei

Copyright © YAMAGISHI Katsuei, 1992

All rights reserved. No part of this publication may be used or reproduced in any form or by any means, without the prior written permission of the author, except in the case of brief quotations embodied in critical articles, reviews, and books on linguistic studies. For information, address: Kobian Publishing Co., 3-11-13, Kobinata, Bunkyo-Ku, Tokyo 112, Japan

First published April, 1992

第一部

和英辭典論考

1. 和英辞典を考える Part Ⅲ

(1) 訂正・検討を要する訳語

以前、私は本書「正」編において、「和英辞典を考える」と題して、Part I, Part II の2度にわたり、和英辞典に関する諸問題を取り扱った。その Part II の最終稿では、「既存の和英辞典には“孫引き”“曾孫引き”と考えられる記述があまりにも多いように思う」と書いた。その一部（教頭、検眼、子ぼんのう、すす、吊り橋、どぶ、名付け親、沼、学芸会など）については、すでに、Part II のあちこちに紹介しておいたが、同稿を読んでくださった読者、知人などから、ほかにどんなものがあるのか、という問い合わせを何度か頂戴した。そこで、今回の「和英辞典を考える Part Ⅲ」はその点から始めたいと思う。

お断りしておきたいが、これは単なる“あらさがし”ではない。私としては、「誤った、あるいは問題のある言語事実を、次から次へと、無批判に“孫引き”“曾孫引き”することへの重大性を、私自身を含めた、辞書関係者が厳しく反省すべきではないか」ということが言いたいのである。それに、私は常に、代案を提示するなどして、建設的な辞書批判をするように努めてきている。

参照した和英辞典は、高校生以上を対象として編纂された、最新和英辞典5点であるが、本シリーズでは、特定の辞典を指す必要がある場合でも、いちいち具体的辞典名は挙げずに、A, B, C... のアルファベットを適宜使用して話を進める。

「口紅」「ティッシュペーパー」

まず、「口紅」についてである。X社の和英辞典は、いずれも、この語